

日本初記録のキクイムシ *Cyclorhipidion corrugatum*

中野文尊

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院生命農学研究科

Cyclorhipidion corrugatum Newly Recorded from Japan

Fumitaka NAKANO

筆者は沖縄県の西表島において、日本から記録がないと思われるゾウムシ科キクイムシ亜科の一種を採集しているため、知人より預かっている採集データと合わせて以下に報告する。なお、採集地は沖縄県八重山郡竹富町（西表島）以下の詳細を示してある。本種の同定をしていただき、投稿を勧めてくださった平野幸彦氏、貴重な採集データをくださった緒方裕大氏、ならびに、標本写真の撮影にご協力くださった戸田尚希氏の各氏に心より御礼申し上げます。

オオズオオキバキクイムシ（新称）

Cyclorhipidion corrugatum (Schedl, 1951)

(図1-3)

1♂, 31. VII. 2017, テドウ山, 中野文尊採集 (図1, 3); 1♂, 25. X. 2017, 同, 中野文尊採集 (図2); 2♀♀, 12. II. 2016, 相良川, 緒方裕大採集。

本種は Schedl (1951) により、インドネシアのジャワ島で得られた雄个体をもとに記載された種である。筆者は自然林内のオキナワウラジロガシと思われる立ち枯れのスプレーイングで、緒方裕大氏はカシ類の枯死木の坑道からほじくり出して得た。本種の雄は頭部、前胸および大あごが顕著に発達し、図1, 2のように体サイズや大あごの内歯の形状などに個体差が見られた。

本種が属するザイノキクイムシ族 Xyleborini は、同系交配の一夫多妻制という配偶システムをとる養菌性キクイムシである。この配偶システムをとるキクイムシは分散、坑道の創設、繁殖および坑道入口のガードなどを行う雌に対して、坑道内で一生を終える雄は小型かつ短命で、体色・複眼・後翅が退化しているものが多く（上田ら, 2009）、本種のように雄の頭部や大あごが発達するのは稀な例であると思われる。梶村（2010）が同様に雄の頭部、前胸

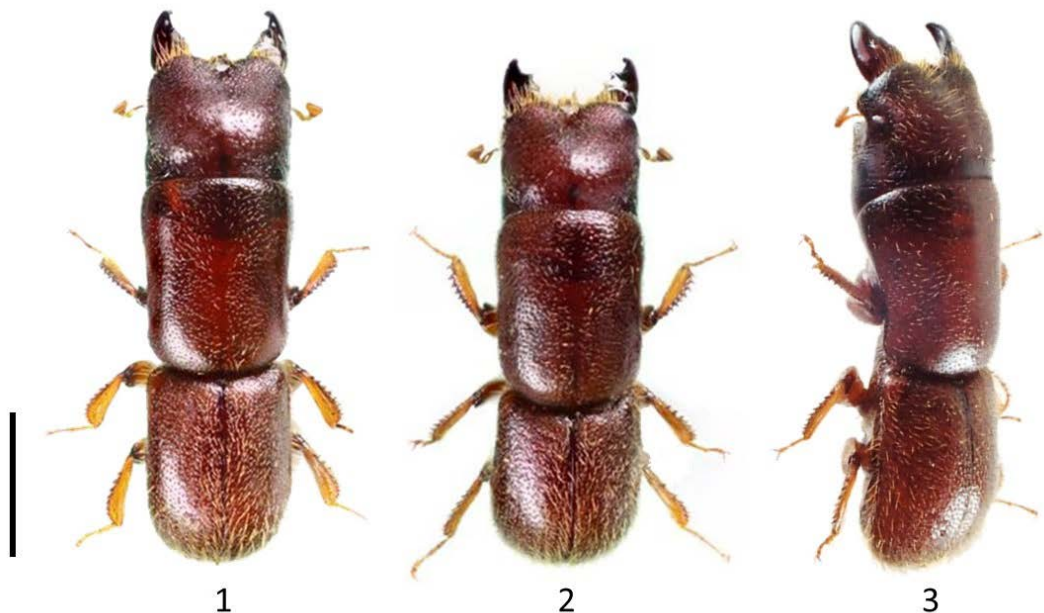


図1-3. *Cyclorhipidion corrugatum* ♂. 3: 図1の個体の側面。スケールバー: 1.0 mm.

および大あごが発達する *Cyclorhipidion* sp. を沖縄本島から報告しているが、本種と同種であるかは不明である。発達した大顎が坑道内での種内競争に用いられるのか、あるいは坑道入口で天敵の侵入を防ぐために用いられるのかは不明であるが、本種がスプレーイングで採集されたことから、樹木の表面、あるいは坑道の入り口で天敵を撃退している可能性が高いと考えられる。なお、筆者は同所において本種の雌と思われる個体も複数採集しているが、こちらに関しては本種の雌という確証がないため、今回

は雄の記録のみに留めた。

引用文献

- 梶村 恒, 2010. キクイムシの繁殖生態. 昆虫と自然, 45 (14): 17-20.
 Schedl, K. E., 1951. Fauna Indomalayaensis, I. Tijdschrift voor Entomologie, 93: 41-98.
 上田明良・水野孝彦・梶村 恒, 2009. キクイムシの生態: 食性と繁殖様式に関する研究の現状と展望. 日本森林学会誌, 91: 469-478.

(2018年8月3日受領, 2018年9月10日受理)

【短報】東京都稲城市でオオタツマアカヒメテントウを採集

オオタツマアカヒメテントウ *Scymnus* (*Pullus*) *rectus* (Ohta, 1929) は、テントウムシの同定に広く使われている黒澤ほか編 (1985) や日本環境動物昆虫学会編 (2009) に、四国・九州・対馬に分布するとされていることもあって、本州にも産することは東日本の愛好者にはあまり知られていないようだ。しかし西日本ではすでに常識のようで、筆者が知りえた限りでも長野 (高橋, 2015) ・三重 (鈴鹿市環境部環境政策課編, 2008) ・京都 (京都府自然環境保全課, 2015; 高橋, 2015) ・奈良 (高橋, 2015) ・大阪 (高

橋, 2015) ・兵庫 (稲畑, 2001; 長島, 2017; 高橋, 2015) ・鳥取 (佐々治, 1991) ・島根 (林, 2011) ・岡山 (鈴木, 2014) ・広島 (亀山ほか, 2009; 大塚, 2010; 佐々治, 1991, 2002) ・山口 (山口県立山口博物館編, 1988) の各府県から報告されている。

筆者は東京都稲城市で本種 (図1) を採集したので報告する。

稲城市丸丸 (多摩川河川敷): 1♀, 26. IX. 2017; 1♀, 22. V. 2018; 稲城市押立 (多摩川河川敷): 2♂♂, 24. IX. 2017; 3♂♂1♀, 12. X. 2017; 1♂, 2. V. 2018. すべて筆者採集・保管。

オニグルミやエノキのスイーピングで得た。近似のニセツマアカヒメテントウ *S. (P.) rectoides* Sasaji, 1971 と同時に得られることが多い。

同定は Kamiya (1961), Sasaji (1971) によった。Kamiya (1961) の♂交尾器の図は Sasaji (1971) に、そして佐々治 (1996) や日本環境動物昆虫学会編 (2009) にもそのまま使われている。この図ではサイフォの先端部背面に付属片のようなものが描かれているが、いずれの本文中にもその説明はない。上に記録した6頭の♂にはそのような付属片が認められなかったが、それ以外の点では外部形態・♂交尾器ともに Kamiya (1961), Sasaji (1971) の記載によく一致したので本種と同定した。



図1. オオタツマアカヒメテントウ♂ (稲城市産, 阪本優介撮影)。

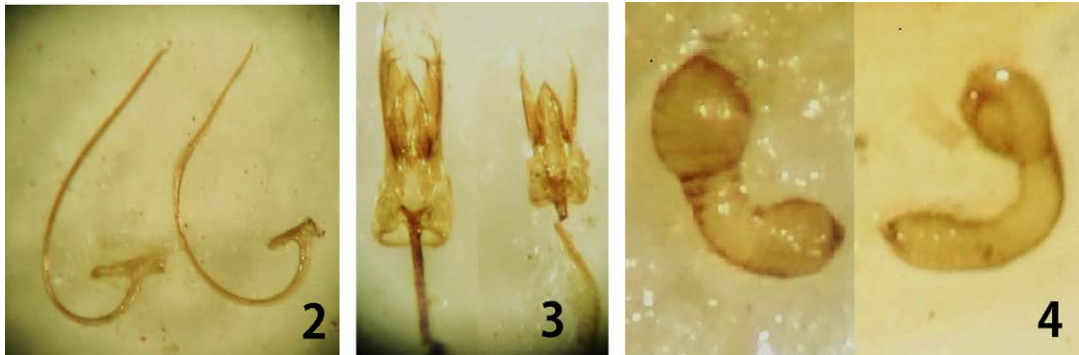


図2-4. ニセツマアカヒメテントウ (左) とオオタツマアカヒメテントウ (右) の雌雄交尾器 (いずれも稲城市産, 伊藤淳撮影)。2, ♂交尾器サイフォ; 3, ♂交尾器包片; 4, ♀貯精嚢。